

2: 泥棒猫

「はぁ……あっ……んんっ♡」

男とセックスしまくったロビンは息を整えながら心地よくそのままベットに横になっていた。

ブリュッ……ブビュッ……

膣内射精で入りきらなかった精子が、下品な音を立てながら膣口から漏れ出てきている。

男はその下品なエロさのある光景を目にしながら、寝バックの状態からそのまま蟹股で寝てしまっているロビンのデカ尻を触りまくった。

改めて自分の女にロビンの尻を触りまくり、興奮が蘇ってくる。

ロビンが心地よさそうに寝てしまったため、さすがに起こすのはやめておこうと考えた男はそのまま自分のチンポを扱きながら、三十路デカ尻に亀頭をあてがおうとしたその時……

ガチャ……

「あ〜、やっぱりもうヤっちゃってたわね。ロビンに先越されちゃった」

女子部屋の扉が開いてそこに立っていたのは、二年立って髪の毛がロングになり、ナイスバディが増し増しになって厭らしさがパワーアップしていたナミだった。

「っ! ? ゴクッ……」

男は目を見開いてナミを見つめる。

上半身は水着のようなブラのようなものを胸に来ているだけで、それ以外の部分は丸見え。

下半身はジーンズを履いており、脚の肉が弾けそうなくらいのパツパツ感が見ているだけで伺える。

相変わらずヒールを履いているため本来よりも身長が高く見えて、スラっとしたイメージがあるが、女体に包まれている牝肉がエロさを露骨に主張して男の股間に刺激を与える。

男はすぐさまナミに近づくと、無遠慮に水着の中に下から手を突っ込んで乳首をコリコリし始める。

「あんっ♡ ちょっと、いくらアンタ専用のフリー乳首だからって、いきなり過ぎない♡ まずは再会を喜びなさいよ♡」

そう言いながらナミは艶のある笑みを浮かべると、右手で男の勃起している肉棒を順手で厭らしく触りだした。

「相変わらずガッチガチね♡ ロビンとは何かくらいやったの？」

「んっくっ……5、6回くらいかな……あんまり……覚えてない……」

「そんなに射精しちゃってたら私がすぐに精子飲めないじゃない! まったく、少しはこっちのことも考えなさいよ♡ くちゅ♡ れろっ♡」

そこまで批判的ではない声色で反応しつつ、男を欲情させるために舌を自ら絡ませに行くナミ。

ナミの厭らしい舌と自分の舌を絡ませながら、男は改めてナミの女体に意識を集中させる。

二年前よりも明らかに大きくなり、張りや形が良い胸は、揉んでいるだけでどんどん精子が放りあがってきそうなくらい気持ちの良い胸だ。

乳首も相変わらずコリコリしており、この魅惑の胸が自分専用になっていることをナミから告げられ、さらに興奮が増してくる

ナミの手コキは肉棒を射精させる気がなさそうな優しさと厭らしさに溢れた触り方も、こそばゆい様な気持ち良さを与えてくれている。

だが厭らしさはアップしており、時折右手で金玉を揉み解しながらチンポの様子を確かめている動きは、ドスケベ泥棒猫を彷彿させるものだ。

「くちゅ♡ れろっ♡ んんっ♡ ちゅっ♡ チンポガッチガチ♡ やっぱ手コキじゃまだ射精そうにないわね」

ナミのキス乳首弄り手コキは確かに気持ち良かったが、ロビンと散々やりまくったのため、さすがにすぐに射精とはいかなそうなチンポの反応だった。

「じゃあ……ちょっと……すごい事してあげる♡」

「あっ……」

そう言いながらナミは男から離れると、厭らしく男を見つめながらジーンズを脱ぎつつ、自分のベットへ足を運んだ。

そして仰向けになって寝ると、頭だけベットからはみ出させて、逆さの状態で男の方を向いた。

髪が重力に持っていかれて床の方に垂れさがっており、逆さのナミの顔は異様な光景に見えるが、そもそも身体がエロすぎるので、興奮が勝っていた。

ナミはその状態で右手で輪を作って口元へもっていく。

「さあ、こっちへいらっしゃい♡ 私の口マンコとセックスしましょ♡」

まさかのイラマチオ宣言を聞いた男は、ゆっくりじりじりとナミに近づき、勃起チンポを彼女の目の前に持っていく。

ナミの目の前にギンギンに勃起した肉棒が来たことによって、彼女は艶のある挑発的な笑みを見せて舌なめずりをした。

「ふふっ♡♡ 何よこの気持ち悪いくらい勃起してるピンピンチンポ♡ 裏筋までバッキバキじゃない♡ ロビンとやりまくった後だっていうのに……そんなに私の事犯したいのね♡」

厭らしいセリフを吐いてくるドスケベ泥棒猫に興奮しまくっている男は、金玉の裏をナミの鼻の穴の上に乗せて匂いを嗅がせる。

「ん あっ!？ クッサ♡ ちょっと～金玉臭すぎじゃない♡」

笑みで口元を歪ませながらフガフガしつつ金玉の匂いを嗅いで興奮しているナミ。

ベットの上にあるその女体は、上半身の水着と同じガラの下水着を装着しており、艶肉がたっぷりついたその身体を興奮でうねうね蠢かせている。

下半身は蟹股に足を開いており、既に自分の左手でオナニーをしていた。

「れろっ♡ くちゅ♡ んれろっ♡ えろっ♡」

男が逆さまで泥棒猫の女体に見とれていると、いつの間にかナミが肉棒を厭らしく舌を伸ばして舐め始めている。

器用に舌を動かしながら竿に絡みつかせて、棒の全体を舐めながら性味を楽しんでいる。

男はそのチンポ舐りに触発されて、再びナミの水着に手を突っ込んで乳首を弄り始めた。

先ほどよりも快感が増しているのか、より硬くなったナミ乳首を強めに摘まんで引っ張ったりする。

「んんっ！？ はああ♡♡ ちょっ！？ 強く摘まみ過ぎよ♡♡」

乳首を摘ままれて身体を震えさせながらも、左手で性貪る様にオナニーして蟹股をさらにうねらせるナミを見て男は興奮した。

その興奮によって我慢が出来なくなり、いきなり無遠慮にチンポをナミの口の中に突っ込んだ。

「んぼっ！？ んぐうっ！？」

男がいきなり肉棒の根元まで口の中へ突っ込んだため、嗚咽を漏らすナミ。

流石にいきなり喉奥辺りまでチンポを突っ込んだのはやりすぎだと考えた男だが、肉棒から伝わってくる快感が、その優しさをマヒさせる。

実際ナミもそこまで抵抗することはなく、未だに左手でオナニーしているままなので、男はそのまま肉棒の気持ち良さを楽しんだ。

滅茶苦茶な体勢でチンポを加えているため、歯が竿にあったいるのだが、その硬さも程よい刺激となっているため気持ちが良い。

喉奥まで加えこんでいるため、口の中全体が脈動するようにチンポに吸い付いてきて、ニユルニユルとした快感を与えている。

既に涎も唇から垂れてきており、唾液たっぷりの口の中でナミの舌がうねうねとチンポに絡みついてきていた。

「んぐっ！ んぼっ♡ れろっ♡ んぼっ♡ ぢゅるっ♡ ぢゅぼっ♡」

初めてのイラマチオでも久しぶりの生チンポなので、不慣れながらも肉棒を舐めとり味を楽しみだすナミ。

男はこのドスケベ淫乱泥棒猫のイラマチオに刺激されて、腰を動かし始めた。

グチュッ！ グチュッ！ グチュッ！ グチュッ！

「んぼっ！？ んぐっ♡♡ ぼっ♡ んぐっ♡ ぢゅるっ♡ ぐぢゅっ♡」

フェラチオよりも激しい粘膜音と嗚咽のような声が部屋中に響き渡る。

口の中の刺激もより強力で、吸い付きは以前よりも強くなっており、腰を引いてもいちいちチンポを吸い込んでくる。

ところどころで歯に当たり、グリュグリュと痛さもあるが気持ち良さが上回っており、逆にワザと歯にチンポを当てたくなっていた。

口の中がバカになり始めているため、唾液が溢れんばかりに漏れ出てきて、潤滑油となりチンポの動きを良くしてしまう。

「んぼっ!!　ぢゅぐっ!!　ぢゅるっ!!!　んぐっ♡♡」

ナミの口マンコの中で激しく舌がチンポに絡みつき射精を促進させていく。

イラマチオが激しくなればなるほどナミの左手の動きも激しくなっていき、膣口から淫音がどんどん漏れ出てきている。

男も負けじと乳首を強く摘まんでは胸を揉みこみ乳肉を引っ張りまくった。

「んぐっ!?　ん　ん　っ!!!!　んぐうううう♡♡」

先ほどから連続絶頂しているのか身体を激しく蠢かせて、逸らせ始めた。

この卑猥なドスケベ泥棒猫の姿を見て、イラマチオの激しい攻めをチンポに感じて男の金玉も疼いてくる。

射精へのラストスパートで腰をより激しく動かすと、ナミが口の中であぐしゃにチンポを求めて吸い付き、さらに激しい刺激が股間から伝わってきた。

凄まじい吸引力と厭らしさがある嗚咽を聞いて血管が浮き出るほど興奮高まった男が、遂に泥棒猫の口の中へ射精する。

ドッピュウウウウ!!!　ドッピュウ!!!　ドッピュウ!!!　ビュルッ!!　ビュルッ!!
ビュルルルッ!!!

射精の瞬間、思い切り乳首を摘まんで胸を引っ張り女体に刺激と快感を与えた。

「んぐっ!?　ん　ぐうううう♡♡♡♡♡♡♡　んんっ♡♡♡♡　ん　ん　ん　ん　ん　ん　♡♡
♡♡♡♡♡♡♡」

目を一杯に見開き、涙を流しながら口の中で射精された精液を喉奥に流し込んでいくナミ。

強制的に喉奥に亀頭を突っ込まれて、直で熱々の精液が喉に流し込まれるていく。

「んぼっ!?　んぐっ!!　ぼぼっ!!」

流石に勢いが強く下品な粘膜音を漏らしながら口から精液を垂れ流してしまっているが、射精と同時に絶頂した膣内を未だに左手でほじくり返していた。

男は射精をして一旦冷静になり、さすがに苦しそうなる嗚咽を漏らしているナミからチンポを引き抜こうとするが……

ガシッ!!

右手でナミが男の身体を押さえつつ、チンポを喉奥まで加えこんだ状態で、精液をすべて飲み込み始める。

「んちゅ♡♡♡　んふっ♡　ぐちゅ♡♡♡♡　れろっ♡　じゅぼっ♡♡」

頭を沿っており、喉元がくっきりと見えている状態で喉を鳴らしながら精液を摂取している喉の動きがはっきりわかって、エロさを引き立たせている。

男はその喉元を優しく撫でながらナミが精液をすべて飲むまで待つてあげた。

「んっ……ぷあっ!!! はあ……はあ……ちょっと……飛ばし過ぎじゃない♡♡♡♡ まあ、こっちは美味しかったからいいけど♡♡♡」

精液をすべて飲み込み、チンポを引き抜いたナミは、上から見ていだけでも分かるくらい厭らしい笑みを浮かべていた。

二年たってドスケベ泥棒猫に進化しているナミに興奮しまくっている男は、既に勃起状態に戻ったチンポにさらに力を加えつつ、ナミの身体の下に潜り込んで女体を抱きかかえる。

「あんっ♡ オマンコ欲しくなっちゃったの? 良いわよ♡♡ 今日は安全日だから、生で……ん” あ”っ♡♡」

男はナミが発言を言い終わる前にバキバキになった肉棒を膣奥へ突っ込んでいた。

既にイラマチオ絶頂していたため愛液駄々漏れで滑りやすくなっており、すんなりと子宮口に押し込むことが出来た。

いきなり子宮口をノックされて下品に口を開けた善がり顔を頭を逸らせながら見せるナミの淫乱女体を抱き寄せる。

するとナミがベリーダンス張りに腰をグラインドさせながら膣内のチンポを刺激してきた。

「んふっ♡ いきなりチンポ奥まで突っ込むなんて……とんだ凶悪チンポね♡ この二年間で私のマンコ恋しくて寂しかったのかしら♡♡」

ナミのチンポ挑発行為にチンポがさらにイライラしてきて、男の肉棒は膣内でどんどん肥大化していく。

「ん” ん”っ♡♡♡ おほっ♡♡♡ んんっ♡♡ チンポ大きくなってきてる♡♡♡♡ 私の膣内ぎちぎちにして……満たされてくる♡♡ はあっ♡ 寂しかったのね♡♡ 良いわよ♡♡♡ この私がアンタの金玉の中の精子、空になるまで付き合っあげろ♡♡♡」

その言葉を聞いて肉棒は膣内をさらにミチミチに満たしていき、興奮した男は腰を振り出した。

パチュンッ!!! パチュンッ!!! パチュンッ!!! パチュンッ!!!

「あっ♡♡ はあっ♡ はあっ♡ 効くううう♡♡♡♡♡♡ 久しぶりの生チンポ!!! 響いてくるううう♡♡♡♡♡♡」

背後から腰をがっちり掴んでのピストンで、毎回子宮を貫かれて久々の生チンポで喘ぎ声を出しまくるナミ。

ミチミチに膣内を満たしているチンポが出たり入ったりして子宮口を突きまくることによって、全身が痺れるくらいの快感がナミに襲い掛かってきたいた。

ナミの膣壁も激しくピストンする肉棒を捕らえるべく必死に絡みついて、刺激を送っている。

イラマチオが凄まじい快感だったため、そちらの方が気持ちいかと考えていた男だが、やはりナミの膣内を生チンポでかき回しまくるのはそれ以上の興奮と快感があり、幸福度を高めていってくれている。

「ん” ん”っ♡♡♡♡ チンポ!!! そう!!! そこ!!! 奥ッ♡♡♡ 良い♡♡♡ 気持ちいい♡♡♡♡♡」

何よりチンポで突くことでナミが反応して興奮させるようなことをどんどん行ってくれるため、聴覚から

の刺激が脳に響き渡った。

二年間で伸びたオレンジ色の髪の毛が顔に絡んでくるが、サラサラでいい匂いの髪が顔にこそばゆい。

その髪の毛から漂ってくる女の匂いを嗅ぎながら腰を振りまくる。

ピストンすればするほどナミの膣内は締りが良くなっていき、絶頂に近づいているようだ。

ロビンの膣内とはまた違ったマンコの締め付け具合にチンポが興奮してすぐさま精子が放りあがってくる。

「こんなにスケベな身体になって……くっ……本当にちゃんと修行してたんですか!!!!」

「し、してたあああ♡♡♡♡ ちゃんと仲間のために強くなってきたけど♡♡♡♡ アンタのチンポはもっと欲しかったのおおお♡♡♡♡♡♡♡♡」

「この!!! ドスケベ泥棒猫!!!! 結婚しろ!!!!!!」

男が射精するためにナミの身体を強く抱きしめ引き寄せて、さらに強くチンポを子宮に押し付ける。

「おほおおおおお♡♡♡♡♡♡♡♡ 求婚チンポ効くううう♡♡♡♡♡ チンポでプロポーズされながら、イクウウウウ♡♡♡♡♡♡♡♡」

さらに肥大化させたチンポをプロポーズしながら突くことによって、ナミの女体を完全にものにしようとする男。

肥大化したチンポがナミの身体の中に入っているのが分るくらい、女体の下腹部が盛り上がり、うによろによ子宮を突いている。

「いっ、いゝ いゝ いゝ いゝ いゝ いゝ いいいい♡♡♡♡♡♡♡♡ する!!! アンタと結婚するから!!! この極太チンポで、一生私の事愛して♡♡♡♡♡♡♡♡ ああああ♡♡♡♡」

半目状態で歯を見せながら笑い浮かべ、涎を垂らしつつ下品な表情で男の嫁宣言をするナミ。

その宣言で膣内がより一層引き締まり、男のチンポが締め付けられた。

ロビンと一緒に必ずこの泥棒猫を自分のモノにするという気持ちがチンポに届いて膣内でさらに肥大化させていく。

「んゝ んゝ いゝ いゝ いゝ いいいい♡♡♡ ダメッ!!!??!?! 壊れちゃう!!!!!!」

拡張され過ぎた自身の膣内から来る刺激に、気絶しそうなほどの快感を感じながらナミは身体を逸らせる。

とても一味には見せられないアヘ顔を晒しつつ、男に抱き寄せられて、極太肉棒と突っ込まれては、二十歳を過ぎたメスの身体を痙攣させていた。

そして、そんなドスケベ泥棒猫に、男は思いっきり膣内射精をお見舞いする。

ドッピュウウウウウ!!!! ドッピュウウウウウ!!!! ドッピュウウウウウ!!!! ビュルルルッ!!!! ビュルッ!!!! ビュルッ!!!! ビュルッ!!!!

「おおおおお!!!! おおっ!! おっ♡♡♡ イクッ!!!! イクッ!!!! イックウウウ♡♡♡♡♡♡♡♡」

ロビンよりも甲高い声を響かせながら、ナミは膣内射精を受けて盛大に絶頂した。

快感から逃げるように身体を逸らせ、つま先立ちになり、舌を突き出して目と口を大きく開けながらの盛大な絶頂。

激しく痙攣をしているため男が何とかナミの身体を抱き寄せている。

チンポが抜けた膣内からは精液があふれ出てきてしまい、男のチンポにもかかってしまう。

クポクポと精液を垂らしているガバガバになったナミの膣口が実に厭らしい。

「はあ……♡♡♡ あっ♡♡ はあ……はあ……♡♡♡ んんっ♡♡ これで私はアンタの女になったわよ♡♡ ちゃんと大事にして、いっぱい愛しなさいよ♡♡♡」

ナミはそのまま右腕を男の頭に絡めさせるとディープキスを始めた。

舌を絡め合わせながら粘膜音を響かせていくと、股間にある男のブツが再び鎌首を上げて、ナミの膣口に触れてしまう。

「んふっ♡ さっそくまた元気になったわね♡♡ いいわよ♡ ロビンが起きるまで、しょうがないから私が相手をしてあげる♡」

ナミの矛盾しているようなドスケベ感情に振り回されながらも、男としては美女二人とセックスできるのは大歓迎なので、そのまま彼女の発言を受け入れつつ、舌を絡ませて、脚も絡ませて、再び濃厚なセックスを開始した。